

## 茶碗の中

讀者はどこか古い塔の階段を上つて、眞黒の中をまつたてに上つて行つて、さてその眞黒の眞中に、蜘蛛の巣のかかつた處が終りで外には何も無いことを見出したことがありませんか。或は絶壁に沿うて切り開いてある海ぞひの道をたどつて行つて、結局一つ曲るとすぐごつごつした斷崖になつて居ることを見出したことはありませんか。かういふ經驗の感情的價値は——文學上から見れば——その時起された感覺の強さと、その感覺の記憶の鮮かさによつてきまる。

ところで日本の古い話し本に、今云つた事と殆んど同じ感情的經驗を起させる小説の斷片が、不思議にも残つて居る。……多分、作者は不精だつたのであらう、或は出版書肆と喧嘩したのであらう、いや事によれば作者はその小さな机から不意に呼ばれて、かへつて來なかつたのであらう、或は又その文章の丁度眞中で死の神が筆を止めさせたのであらう。とにかく何故この話が結末をつけないで、そのままになつて居るのか、誰にも分らない。……私は一つ代表的なのを選ぶ。

\* \* \*

天和四年一月一日——即ち今から二百二十年前——中川佐渡守が年始の廻禮に出かけて、江戸

本郷、白山の茶店に一行とともに立寄つた。一同休んで居る間に、家來の一人——關内と云ふ若黨が餘りに渴きを覺えたので、自分で大きな茶碗に茶を汲んだ。飲まうとする時、不意にその透明な黄色の茶のうちに、自分のでない顔の映つて居るのを認めた。びつくりしてあたりを見廻したが誰もゐない。茶の中に映じた顔は髮恰好から見ると若い侍の顔らしかつた、不思議にはつきりして、中々の好男子で、女の顔のやうにやさしかつた。それからそれが生きて居る人の顔である證據には眼や唇は動いてゐた。この不思議なものが現れたのに當惑して、關内は茶を捨てて仔細に茶碗を改めて見た。それは何の模様もない安物の茶碗であつた。關内は別の茶碗を取つてまた茶を汲んだ、また顔が映つた。關内は新しい茶を命じて茶碗に入れると、——今度は嘲りの微笑をたたへて——もう一度、不思議な顔が現れた。しかし關内は驚かなかつた。『何者だか知らないが、もうそんなものに迷はされはしない』とつぶやきながら——彼は顔も何も一呑みに茶を飲んで出かけた。自分ではなんだか幽霊を一つ呑み込んだやうな氣もしないでもなかつた。

同じ日の夕方おそく佐渡守の邸内で當番をして居る時、その部屋へ見知らぬ人が、音もさせずに入つて來たので、關内は驚いた。この見知らぬ人は立派な身装の侍であつたが、關内の眞正面に坐つて、この若黨は軽く一禮をして、云つた。

『式部平内でごさる——今日始めてお會ひ申した……貴殿は某を見覚えならぬやうでごさるな』甚だ低いが、鋭い聲で云つた。關内は茶碗の中で見て、呑み込んでしまつた氣味の悪い、美し

い顔、——例の妖怪を今眼の前に見て驚いた。あの怪異が微笑した通り、この顔も微笑して居る、しかし微笑して居る唇の上の眼の不動の凝視は挑戦であり、同時に又侮辱でもあつた。

『いや見覚え申さぬ』關内は怒つて、しかし冷やかに答へた、——『それにしても、どうしてこの邸へ御入りになつたかお聞かせを願ひたい』

「封建時代には、諸侯の屋敷は夜晝ともに嚴重にまもられてゐた、それで、警護の武士の方に赦すべからざる怠慢でもない以上、無案内で入る事はできなかつた」

『あゝ、某に見覚えなしと仰せられるのですな』その客は皮肉な調子で、少し近よりながら、叫んだ。『いや某を見覚えがないとは聞えぬ。今朝某に非道な書を御加へになつたではござらぬか……』

關内は帶の短刀を取つてその男の喉を烈しくついた。しかし少しも手筈がない。同時に音もさせずその闖入者は壁の方へ横に飛んで、そこをぬけて行つた。……壁には退出の何の跡をも残さなかつた。丁度蠟燭の光が行燈の紙を透るやうにそこを通り過ぎた。

關内がこの事件を報告した時、その話は侍達を驚かし、又當惑させた。その時刻には邸内では入つたものも出たものも見られなかつた、それから佐渡守に仕へて居るもので『式部平内』の名を聞いて居るものもなかつた。

その翌晩、關内は非番であつたので、兩親とともに家にゐた。餘程おそくなつてから、暫時の面談をもとめる來客のある事を、取次がれた。刀を取つて玄關に出た、そこには三人の武裝した人々——明かに侍達——が式臺の前に立つてゐた。三人は恭しく關内に敬禮してから、そのうちの一人が云つた。

『某等は松岡文吾、土橋久藏、岡村平六と申す式部平内殿の侍でござる。主人が昨夜御訪問いたした節、貴殿は刀で主人をお打ちになつた。怪我が重いから疵の養生に湯治に行かねばならぬ。しかし來月十六日にはお歸りになる、その時にはこの恨みを必ず晴らし申す……』

それ以上聞くまでもなく、關内は刀をとつてとび出し、客を目かけて前後左右に斬りまくつた。しかし三人は隣りの建物の壁の方へとび、影のやうにその上へ飛び去つて、それから……

\* \* \*

ここで古い物語は切れて居る、話のあとは何人かの頭の中に存在してゐたのだが、それは百年このかた塵に歸して居る。

私は色々それらしい結末を想像することができが、西洋の讀者の想像に満足を與へるやうなのは一つもない。魂を飲んだあとの、もつともらしい結果は、自分で考へて見られるままに任せて置く。

(田部隆次譯)

*In a Cup of Tea. (Kotia.)*